

## 常時閉眼傾向にある患者の食事摂取時の関わりについて

—歌い掛けと上肢の運動を繰り返し行うことで認識の向上を目指して—

NHO 鳥取医療センター看護部 5 病棟

衣笠花恵\* 圓井和恵 矢島玲子

## Care during meal intake for patients with a tendency to close their eyes

—Aiming to improve awareness of meals and eating  
through repetitive arm movement and singing—

Hanae Kinugasa\*, Kazue Marui, Reiko Yajima

The 5th Ward, Department of Nursing, NHO Tottori Medical Center

\*Correspondence: 鳥取市三津 876 番地 5 病棟

### 要旨

染色体異常症（14q トリソミー）、レノックス・ガストー症候群、甲状腺機能低下症を有し、難治性てんかん、重度知的障害と発達障害、行動異常を呈している 50 代で女性の A 氏に対する食事介助の際、口を固く閉じた状態が多かった。開口不良の時は、スプーンで押し開けるように開口することで、口腔内に、受動的に食物を取り込むようにするため、むせることがあった。これは、常時、閉眼傾向の A 氏が視覚からの食物についての情報を十分に得ることができていないことにより、食物の認識や摂食・嚥下の「先行期」の食事動作がうまくできなくなっていた為なのだろうか。また、食事介助者により、介助方法にバラつきが見られていたことは、一定した食事動作の獲得に影響を及ぼしていたのだろうか。

そこで、開眼を促すための統一した関わりを繰り返し実施する取り組みをした。その結果、食事に対する認識の向上や、先行期の円滑遂行に繋がり、食事介助中の開眼や開口、食事時のむせなどにおける変化が認められるようになった。鳥取臨床科学 10(3), 131-138, 2018

### Abstract

Patient A is in her 50s with chromosome abnormality (14q trisomy), Lennox-Gastaut syndrome, hypothyroidism, intractable epilepsy, severe intellectual disabilities and developmental retardation, and behavioral abnormality. When providing meal assistance for patient A, she often had her mouth shut firmly. When her mouth would open poorly, we opened her mouth by pushing with the spoon to force opening so that she would intake food into her mouth passively but choke occasionally. This might have been attributed to the fact that patient A tended to close her eyes regularly. Because she did not obtain information about the food by vision, which may have prevented her from perceiving the food, and performing feeding actions well in the 'preceding phase' of eating and swallowing. Furthermore, a different type of assistance method was provided by different meal assistant, which might have affected the acquisition of consistent feeding action. Therefore,

we endeavored to provide constant care repeatedly to help the patient keep her eyes open. As a result, an improvement in the perception of food and smooth achievement of the preceding phase were observed. Owing to the improvement, we could observe changes in opening the eyes and the mouth during meal assistance as well as an improvement in choking during meals. Tottori J. Clin. Res. 10(3), 131-138, 2018

**Key words:** 重症心身障害者, 摂食・嚥下の先行期, 摂食時の視覚情報, 食事前運動, 食事介助中の閉眼, 食事介助中のむせ; children and persons with severe intellectual and physical disabilities, phase preceding phase of eating and swallowing, visual information during meals, premeal exercise, closing eyes during meal assistance, choking during meal assistance

## はじめに

通常, 私たちは栄養を摂取するために, 何をどのようにすれば食べることができるのかを自然に判断し, 口の中に取り込んでいる. 食事を口から食べるためには, まず「先行期」と呼ばれる食物を食物と認識し, 口唇と歯によって口腔内にとり組む段階がある. そして, 食物の位置の確認や, 色彩・形状・香りなどの情報, 食事の雰囲気など, 摂取する上での環境的な意味からの刺激を視覚や聴覚・嗅覚などの受容器から感覚を受けていることにより, 円滑な先行期を遂行できている. しかし, A 氏の場合, 常時閉眼しているため, 視覚からの情報を十分に得ることができていない

A 氏の食事介助の際, 口を固く閉じた状態の時が多い. 開口不良の時は, スプーンで押し開けるように開口し, 受動的に口腔内に食物を取り込むようにするため, むせることがある. それは, A 氏が食物からの十分な視覚情報を得ていないことにより, 食物の認識や「先行期」の食事動作がうまくできないためなのだろうか. また, 食事介助者により, 介助方法にバラつきが見られることも, 一定した食事動作の獲得に影響を及ぼしているのだろうか.

岡田ら<sup>1)</sup>は, 「わたしたちの生活は情報が雑多でペースも早い. そのような状況を理解するのが難しいのであれば, 生活動作や生活の流れをなるべくパターン化することで, くり返し経験していくうちに蓄積できるように

工夫していくべきである.」と述べている. しかし, A 氏に食事介助をする介助者により, 体位, 声かけ, 一口量などの介助方法や, 開眼を促す関わりにバラつきがあり, 繰り返し経験することができていないため, A 氏は一定した食物の認識や食事動作が出来ていないのではないかと考え, 本研究に取り組んだ.

## 1. 研究目的

A 氏に対し, 統一した開眼を促す関わりを繰り返し持つことにより, A 氏の食事に対する認識の向上に繋がり, 食事介助中の開眼, 開口, 食事中のむせなどにおける変化に繋がらないか, 明らかにする.

### [用語の定義]

- ・食事に対する認識: スプーンを近づけると自ら開口し, 食物を口腔内に取り込む動作.
- ・食事前運動: 食事開始前に, 「手を合わせましょう」のメロディに合わせ, 歌を歌いながら上肢の運動を行い, その後, 口唇マッサージを行うこと.
- ・観察チェック表: 食事前運動と食事介助中の様子を観察したチェック表.

## II. 対象・方法

### 1. 症例

A 氏, 50 歳代, 女性. 罹患疾患は, 染色体異常症 (14q トリソミー), レノックス・ガストー症候群, 甲状腺機能低下症.